久米島の絵画と漆器

津波古 聡

はじめに

久米島は、周囲約53km、人口1万弱のそれほど大きくない島に王府時代の遺産である書画や漆器、陶器などの美術工芸品(以下、資料と記す)が残されている。これら資料は、主に1756年に尚穆王冊封のため琉球に向かった全魁・周煌一行の御冠船が久米島沖にて遭難し、これを救助した功績により下賜されたものである。現在でもかつて地頭職にあった旧家などに保管されている。

同島に現存する資料は、地頭代の役職であった家やノロ関係の家に保管されており、資料を分類すると古文書・染織・漆器・陶器・書画類に分けられる。その他工芸の特産としては唯一紬があり、久米島紬として知られている。また壺屋焼やその他中国辺りの焼物なども島内で見られるが、ここでは主に絵画と漆器について報告したい。

今回の調査は資料の確認とその調書作成を主におこなった。資料は、各機関がおこなった調査報告書を参照し、あらたに確認できた資料について時間のゆるす限り調書をとった。

調査地は、具志川村と仲里村の代表的な旧家を中心とした。なかでも屋慶名家、栄野本家、平田家などのようにノロ関係資料を収蔵しているところは、資料の性格からウマチー(稲穂儀礼)の時以外、公開しない習わしがあるため期間が限定されたものもある。このためノロ関係の衣裳及び漆器については、時期的に「ウマチー」の終了後翌日までという制限があったため県文化課が実施している平成6年度県内所在染織品調査と平行して行った。

1. 絵 画

久米島の絵画は、上江洲家と喜久村家に集中してあり、すでに法政大学や県文化課の絵画遺品調査で報告されている。また、濱川家にある人物像(僧侶)についても法政大学において調査済みである。そこで上江洲家と喜久村家の絵画の概要とその他比嘉景常著『久米島紀行』に登場した殷元良の作品を報告してみたい。

(1) 上江洲家の絵画

上江洲家の絵画は平成4年2月にその大方の資料が県立博物館に寄託されている。これ ら絵画資料には伝自了筆「寿老人」や華国などの他に異国船、進貢船を描いたもの、年画 と呼ばれる中国風の絵画が所蔵されている。年画は関帝王や寿老人または神話故事などを 題材としためでたい図柄や図柄を文字の形にそって表現されたものである。中国・台湾などでは正月(春節)その他の行事などの飾りつけてとして用いられた。この手の資料は、八重山の久場島清喜が写した下絵(八重山博物館蔵)にも見え、比較的多く琉球に入ったことが伺える。極彩色の大衆のための絵で、筆致は優れているとは言えないものの絵画の用途及び行祭事との関連について研究するためには重要なものである。久米島でどのように使用したかは不明だがおそらく中国や台湾と同様に行祭事等に用いたと思われる。

異国船の絵は余り見かけない題材で、画面の上部に馬艦船が見えることから港は那覇港であろう。那覇港に停泊している外国船からはボートが降ろされ、望遠鏡をのぞくもの、そこら辺を探索する人物が見える。異国船は蒸気船で、黄赤青の三色旗をなびかせた黒船である。琉球王国の終わり頃外国船が盛んに琉球を訪れており、『球陽』などにも数多く記録されている。このような外国船は、屛風等にも見えるが、本資料は船の様子など比較的くわしく描かれている。

(2) 喜久村家の絵画

1756年、尚穆王冊封のため琉球に向かった全魁・周煌一行の御冠船が久米島仲里の真謝沖合いで台風と遭遇し、座礁するが久米島の住民が冊封使一行を救助。さらに詔勅なども運び出し、保管したことへの感謝のしるしとして周煌の「福」の書と孫億筆「花鳥図」が下賜された。その資料が現在も同家に残され、「福」は扁額に仕立て直されている。「花鳥図」は現存、県指定文化財となっている。作者の孫億は山口宗季など琉球の絵師に影響を与えた福州の絵師で知られている。他に「片目地頭代絜聡肖像画」があり、先の二資料の由来が賛に記録されている。ただ、この作品は保存状態が悪く、早急に修理を施す必要があると思われる。なお、「福」の書については、上江洲家にもあり、後年に模写したものと思われる。

(3) その他

久米島に現存する絵画については上記の両家が代表的な資料を保存しており、詳細な報告がなされているのであえて概要のみ記したが、近年県立博物館に寄託され、現在個人が所蔵している殷元良の作品について記してみたい。

殷元良の高僧人物の作品が久米島にあると知りえたのは比嘉景常著「久米島紀行」であった。昭和12年、比嘉が一中の入学試験の監督員のため久米島に渡った時の紀行文である。 ガリ刷りのようなこの紀行文は同年琉球新報に連載されている。

比嘉は試験の採点も終わった2月13日に上江洲知元氏の親類にあたる屋号内間前宅(与 世盛家)へいく。そこで「琉球首里中山殷元良」の署名のある高僧人物の一幅の絵に遭遇 し、感嘆している。さてこの作品はその後ハワイに渡り、一時県立博物館に寄託されていた。袈裟姿の僧が左手に鈴を持ち、天上より来迎する高僧を描いたものである。おそらく普化僧の来迎を描いた図であろう。この作品の落款は「球陽中山首里殷元良 殷元良印(白文) 廷器氏 (朱文)」であった。落款のみで見れば比嘉が見た高僧人物と異なることになる。しかし、比嘉が見聞した殷元良の作品はハワイに渡った作品あり、署名は比嘉の記憶違いと思われる。これと同じ構図のものがもう1点あるが、残念ながら実物ではなく、モノクロ写真で確認された。この写真は県立博物館にあり、アルバムに貼られた写真の状態から見て師範学校の郷土資料室にあったものと推測される。この高僧人物の絵は上部に月□叟と言う人物の賛があり、署名は「殷元良 方印 方印」のみである。状態はかなり悪いらしく所々図が消えている。片方が写真ということもあるが僧の表情表現に若干の違いはあるもののさほど大きな相違は見られない。したがって、同名の作品は2点あったことになるが人物の作品が少ない殷元良の作品を研究する上で貴重なものと言える。 なお、殷元良の作品が与世盛家にあった経緯は、記録がなく不明である。

2. 漆 器

久米島の漆器では、山里氏所蔵の君南風の丸櫃がよく知られている。黒漆双鳥菊点斜格子沈金丸櫃(大)と緑漆鳳凰雲点斜格子沈金丸櫃(小)の外櫃と内櫃の二つからなる。君南風は、1500年、八重山のオヤケアカハチの乱を平定した際に、その陣頭にたち、王府軍を勝利に導いたと言われ、その功により久米島の神女の最高位に置かれた。丸櫃はこのとき尚真王から拝領した「ちよのまくび玉」を容れたものといわれる。沈金の作例では最古のものといわれ、琉球漆器を研究する上で貴重な漆器である。そのほか衣裳を保管していたと言われる御衣櫃がある。蓋甲全面なく、わずかに蓋鬘の一部(蝶番の部分)が残されている。漆面の状態が悪いため文様の全体は把握できないが所々残っている文様の断片から牡丹唐草と思われる。

今回調査したなかで屋慶名家、平田家、栄野本家などが保管していた丸櫃の調査の機会を得たのでここで報告しておきたい。この三家は漆器とともに衣裳類も所蔵している。なかでも屋慶名家と栄野本家の丸櫃の加飾技法は沈金の丸櫃で栄野本家は緑漆であったが、屋慶名家の丸櫃は状態が悪く漆色までは特定できなかった。平田家の丸櫃は曲物、生漆のみで加飾はなかった。

(1) 屋慶名家の丸櫃

宇江城の屋慶名家は、祠に衣裳とともに丸櫃を保管しているが、全体的に風化しており、 外は黒漆のようだが特定はできない。蓋が四片に割れ、本体は約2cm幅で縦割れがあり、 合口の立上り部分は破損している。内は朱漆で瓦磚粉下地、布着せ、曲物で本体の胴部に 点斜格子文で窓絵らしき図柄が見えるが、状態が悪いため文様については不明である。蓋 甲は文様らしきものは確認できなかった。しかし蓋鬘の文様は比較的はっきりしていて牡 丹唐草と思われる。手掛金具が左右に2個あり、内には曲玉やビーズ玉、古銭などが数多 く収納されていた。なお、同家には神扇が保存されていたが紙どうし密着しており、広げ ることができなかった。その他絹製の大袖衣などの衣裳も保管している。

屋慶名家は堂之比屋の家系と言われている。堂之比屋(生没年不詳)は養蚕の技術を中国から久米島へ伝え、また比屋定集落の東端にウティダ石(太陽石)を建て、天体観測したとの伝説がある。

(2) 栄野本家の丸櫃

宇根の栄野本家の丸櫃は、緑漆に沈金の加飾が施されている。加飾などはしっかり残されており、点斜格子文の地に太湖石と花卉の窓絵が沈金であらわされている。窓絵は本体の2面にあり、その間に瑞雲を配置、蓋甲には牡丹唐草文を表している。銅製の手掛金具が取り付けられているが、その反対側は金具が付いたまま破損し、その破片が本体の内にあった。内は朱漆塗りで、下地の布が見える。瓦磚粉、布着下地の曲物であるが、本体の一部、合口の立上り、蓋鬘、蓋甲の一部が破損し、本体の一部はテープで補強してある。内には曲玉とビーズの首飾りがあった。この丸櫃もノロ衣裳とともにあった。

屋慶名家・栄野本家の丸櫃はノロの諸用具のひとつであり、首里王府からの拝領品の可能性があるが、記録がなく不明である。

久米島のノロ関係の諸用具は、稲穂儀礼のウマチー期間以外は公開していないところが多く、今回の調査もこのウマチーの期間でしか実施できなかった。この期間はまた、衣裳や諸道具の陰干しも兼ねているようだ。しかしながら漆器もさることながら衣裳類も風化・退色等が激しく、早急になんらかの保存手段を取らなければならないが、自然に朽ちはて破片類となり、また粉が吹き出し端切れになったにせよ断片を保管しているのはなぜかたのもしく思えてならない。

(3) その他の漆器

丸櫃に見られるように漆器の多くは、ノロ関係のひとつとして現存するが、具志川村の上江洲家には、やはり祭祀用の容器として食籠や茶托、盆などがある。なかでも黒漆の2段の食籠及び食籠台は九角をしている。食籠台は4個ありいずれも加飾はなく黒漆のみである。通常、食籠は丸か八角をしているが造りにくい九角にした理由は不明である。その他、朱漆山水楼閣人物箔絵盆、朱漆巴紋牡丹沈金茶托(蓋付き)などがある。

上江洲家の漆器は、その大方が加飾なしのものでいわゆる食器として用いられたようで、数があり、当然なかには行事などの来客用として出されたものも含まれていると思われる。その他、「馬の角」で知られるで濱川家は、陶器・染織などが一般公開されていたが、漆器は明治以降の盆や東道盆などが所蔵されていた。

4. おわりに

久米島に伝わる衣裳や曲玉それを納める丸櫃などは、神女に関係するもので、君南風を中心に各村に伝わっている。このような資料が島の行祭事、今回は「ウマチー」という祭事のわずかな時間であったが衣裳や曲玉、丸櫃さらには神扇まで所蔵していることが確認できた。しかしながらこのような資料の収蔵している関係者は、高齢であり、今後も各家で管理が可能かどうか大きな課題として残されている。幸いにも久米島に博物館建築が計画されており、各家の資料と博物館の関係をどう扱っていくのか議論が必要であろう。

今回の調査で漆器の調査は限定された期間とひとつの分野でなく、他の分野も同時に実施したため十分とは言えない。また、美術工芸の調査は、物にあたる調査の仕方で大方行われるが、今回の調査で聞き取りの必要性を痛感させられた。特に君南風などノロの用具については、その容器の歴史のみ語られ、祭祀のなかでの扱い方・使い方などが課題として残された。また、調査は当地の行祭事を十分に尊重し、留意しなければならないことはいうまでもない。

参考文献

- (1) 琉球漆工芸 荒川浩和・徳川義宣著
 - P82 87――第二章製作年代の推定し得る現存作品

第二節初期 • 第二沈金 • 密陀絵

P 210 第四章 琉球漆工芸の問題点

第一節琉球沈金の問題点

第二項久米島伝来の沈金小櫃

- (2) 沖縄美術全集 第2巻 漆芸・第4巻 絵画 沖縄タイムス社 1989
- (3) 県内絵画遺品調査報告書 沖縄県教育委員会 1977
- (4) 久米島総合調査 法政大学
- (5) 久米島紀行 比嘉景常著 s 12年
- (6) 中国伝統年画図録 川瀬健一編 東洋思想研究所 1993
- (7) 沖縄文化の遺宝 鎌倉芳太郎著 岩波書店 1982



普化来迎図

モノクロプリント

作者:殷元良(座間味用昌、1718~1769)

法量 (写真の大きさ): タテ・14.1 ヨコ・6.7



普化来迎図

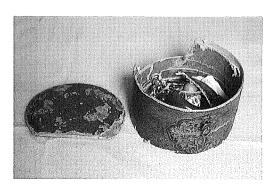
紙本墨面

作者:殷元良(座間味用昌、1718~1769)

法量:タテ・89.0 ヨコ・38.4

落款印章:「琉球中山首里殷元良」

「殷元良印」白文方印(タテ, ヨコともとに2.4) 「廷器氏」朱文方印(タテ, ヨコともに2.4)



緑漆窓絵瑞雲点斜格子沈金丸櫃 (栄野本家)

法量:本体・高さ10.0 径・18.2 蓄 ・高さ測定不可 径・17.0 ※法量は現状のまま測定



沈金丸櫃 (屋慶名家)

法量:本体・高さ12.1 径・18.0 蓄 ・高さ3.0 径・19.0 ※法量は現状のまま測定